

No.3106

英領ビルマにおける「人種/民族」・「宗教」をめぐる  
キリスト教的動態の諸相の解明:1860-1915

大阪大学 日本学術振興会特別研究員 PD

藤村 瞳

2020年度はコロナ新型感染ウイルスの世界的な蔓延により、予定していた海外調査の実施が困難となった。そのため、新たな史料の収集・精読作業はすすめることができず、その点では研究活動も当初の予定より停滞した。よって、この一年は2019年度および以前に収集した既存の史料を精読に専念することとした。

当初、本研究課題では、1910年のエディンバラ世界宣教会議の開催という出来事が英領ビルマのバプテスト信徒にどのように受け止められたかという点について分析を行う計画であった。しかし、昨年度（2019年度）の活動の結果をうけ、当初想定していた分析視角を変更し、アメリカのプロテスタント諸派によるキリスト教共励会を軸にすることとした。そこで、キリスト教共励会を含む20世紀初頭のキリスト教青年団体の台頭について先行研究を整理し、そのうえでビルマ語史料の精査をすすめることを試みた。その結果、当時のキリスト教青年団体の諸活動にはアシューとアサウンという2名のビルマ人牧会者の兄弟が積極的に関わっていたことがわかった。両名に着目してビルマ語史料を読み込んだ結果、当時のビルマ人バプテスト知識人によってキリスト教青年団体をつうじて超域的なネットワークが経験されていた具体相が明らかになってきた。その一例として、インド土着伝道会（National Missionary Society of India: NMSI）創設への関与がある。この創設集会に参加した在地信徒17名のうち、アサウンはビルマ代表として出席した。さらに、セランポールの会合の直後、1906年1月にNMSI代表自身がラングーンをはじめとするビルマの各都市を訪問し、英領ビルマからのメンバーを募ろうとしていた。しかし、現時点では上述以上のことはわかっていない。例えば、アサウンが如何なる経緯でこのNMSIに参加することになったのか、発起人のアザーリアとの関係などについては不明な点が多く残る。これらは今後の課題としたい。

アシュー・アサウン兄弟は、キリスト教共励会の活動と世界会議にも参加した。キリスト教共励会とは、1880年にアメリカで発足した超教派的な青年団体である。英領ビルマでは1901年に全ビルマキリスト教共励会第一回集会が開催され、組織が結成された。アシューは同組織の代表に選出され、活動の中核を担った。そして、1909年11月には、インドのアグラで開催されたキリスト教共励会世界会議（Christian Endeavor World Convention Agra）へ出席した。彼らの参加レポートからは、アジアの土着信徒として白人中心的な会議の様相に不満も感じつつも、高い英語力を有するエリート在地民として一定の賞賛と注目を集められたことには満足するなど、異なる二種の反応が看取された。西洋人（＝英語話者）中心主義的な姿勢に関しても、インド人信徒や日本人キリスト教徒が表明したような強い西洋人批判にビルマ人信徒らは与しなかった。そうした態度の背景には、「ビルマのバプテスト」として筆頭に挙げられることが多く、またビルマ人のその10倍の信徒コミュニティを有したカレン・バプテストに対する劣等感があり、世界会議で丁重に扱われる経験がビルマ人信徒としての自己肯定感・成功体験につながったのではないかと推察される。

今年度の調査からは、西洋人／アジアの在地民といった後の「民族」につながる認識の枠組みや、キリスト教徒としての世界的連帯など「宗教」概念を捉えるに至る具体相は明らかになってきたが、史料調査の未実施により史料が不足しており、「宗教」・「民族」の概念的受容や認識の変遷については解明できなかった。海外での史料収集も未だ困難な状況にあるが、今後も調査・史料精読をつづけ考察を深めていきたい。